＜授業実践９＞「古典探究」読むこと

１　単元名

応用演劇（アプライド・ドラマ）の手法を用いて、人物の心情を理解しよう

２　指導目標

(1) 単元の目標

・先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めることができる。（〔知識及び技能〕(2)のエ）

・古典の作品や文章について、内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりすることができる。（〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ「読むこと」(1)のオ）

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。（学びに向かう力、人間性等）

(2) 言語活動

ア　言語活動

古典作品について、その内容の解釈を踏まえ、身体を使って表現する活動

イ　言語活動のねらい

応用演劇(アプライド・ドラマ)とは、「ドラマ教育」という、ドラマを使った教育方法の一つである。

観客に見せることを目的とせず、プレテキストを用いてさまざまな問題を含んだドラマを演じる活動をする。活動そのものの過程において参加者が体験を分かち合うことで、問題解決の糸口を探ったり、自己理解と他者理解を深め、思考力、想像力を養ったりすることに効果的であるとされている。

この応用演劇（アプライド・ドラマ）の手法を用いて本文中の登場人物の身体の置かれる位置を考察し、追体験することで、登場人物の心情を実感し、理解を深めることができるよう導きたい。特に藤原公任が和歌の船を選んだ経緯など、テクストだけでは理解しにくい部分について考えを深める契機としたい。

本単元においてはより本文に着目させるねらいからシナリオとなるプレテキストを用いず、考察する手だてとなるタスクのみを与えて活動を行う。

(3) 教材

ア　教材

『大鏡』「三船の才」（『精選古典探究　古文編』東京書籍）

イ　教材観

当代きっての才人藤原公任と当代きっての権力者藤原道長との穏やかなやりとりの中に、政治的意図や人間の矜持などがよく表れた教材である。作品の表現意図を深く理解することで、ただ歴史上の有名な人物としてだけではなく、そこにいる生身の人間としての言動を捉え直すことができ、生徒自らが自分自身の生き方を考えることにつなげることができる。

(4) 学習者観

与えられた課題には素直に応じ、真摯に取り組む者が多い。その一方で、言われたこと、与えられたテクストに疑問や関心をもち、主体的に根拠や背景について考えを深めていくことができる生徒が

少ない。「何があったのか」という事実のみにとどまらず、「なぜそうしたのか、なぜそうなったのか」を考えさせ、身体や言語を実際に用いながら、実感として人間の心情を捉える姿勢を身に付けさせたい。

(5) 主体的・対話的で深い学びの工夫

事前調査と現代語訳を踏まえた上で本文と比較する場を設け、生徒各自が気になる表現を探したくなるよう促した(主体的)。

事前の調査をグループごとに分担して課し、ジグソー活動の場を設けた。また、現代語訳についてもグループで分担して行うようにし、気になる表現について話し合う場を設定した(対話的)。

与えたタスクごとに振り返りを記入させ、最後に全体を通じての振り返りや自己評価の場を設けた(深い学び)。

3　観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。	「読むこと」において、古典の作品や文章について、内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりしている。	古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げ、深めようとしている。

(2) 評価方法

ア　知識・技能

定期考査によって評価する。

イ　思考・判断・表現(読むこと)

ワークシート及びリフレクションシートの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
人々の心情について言動や調査結果、身体を使った活動を基にしながら考察し、自らのものの見方を広げたり深めたりしている。	人々の心情について言動や調査結果を基に本文をより深く解釈した上で考察し、更に身体を使った活動を通じて自らのものの見方を広げたり深めたりしている。	人物の心情について言動や調査結果、身体を使った活動を基にして自らのものの見方を広げたり深めたりしている。	人物の言動について考えている。

ウ　主体的に学習に取り組む態度

グループ活動時の行動、ワークシート及びリフレクションシートの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
本文の表現について積極的により多くの課題を見つけ、仮説を立てて話し合いにおいて検証	本文の表現についてどういうことなのか、なぜそうした表現がなされているのかといったこ	本文の表現について課題を見つけ、積極的に解決に向けてグループにおける話し合いで検証し、考	本文の表現についてグループで話し合おうとしている。

を重ねながら考えている（α）。	とに積極的に仮説を立て、話し合いにおいて検証を重ねながら考えようとしている。	えようとしている。	
学習の見通しをもって登場人物の状況について本文の叙述から仮説を立て、身体を使った活動から実感を通して検証し、より本文の理解を深めている（β）。	学習の見通しをもって登場人物の状況について本文の叙述から仮説を立て、実際に身体を使った活動を通じて自分の体験と重ね合わせたり実例を挙げたりしながら検証しようとしている。	学習の見通しをもって登場人物の置かれた状況について仮説を立て、実際に身体を使った活動を通じて考えようとしている。	本文の表現について身体を使った活動から、更に考えを深めようとしている。

※α・βは、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

４　単元の指導計画（配当時間４時間）

次（時間）	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点 ＊生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇観点　□点検・確認■分析 ＊「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第０次（事前準備）	・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ（前時）。 ・グループで分担をし、ワークシートⅠを用いて事前調査を行う。	・課題として取り組ませる。 ・安易に不確かな情報を引用しないよう注意を促す。	◇（知） □「記述の確認」（ワークシートⅠ）
第１次（１時間）	・本文を音読する。 ・本文を三行程度ずつに分け、グループで分担をして、ワークシートⅡを用いて各自で現代語訳する。 ・できあがった現代語訳をグループで合わせて完成させる。	・授業者の範読ののち各自音読を繰り返させる。 ・各自で現代語訳をさせた後にグループで合わせ、吟味をさせる。 ＊授業者は生徒の活動を見守り、生徒が自らの力で現代語訳するよう促す。その上で分からなかったところはメモを控えさせておく。	◇（知）（態） □「記述の確認」（ワークシートⅡ上部半分） ＊生徒相互で未解決の部分について補い合わせながらワークシートの現代語訳部分を完成させる。自分の担当箇所で分からないところがあればグループ内で質問させる。

第2次（2時間）	・ワークシートⅡ（下部半分）に自分の気になる表現やよく分からない表現を書き出す。 ・グループでワークシートを確認する。 ・事前調査結果（ワークシートⅠ）を用いながら問題解決を試みる。	・自ら課題を見つけ、考えさせる。根拠として各々の調査結果を提示させ、グループでの解決を試みさせる。 ＊本文についてよく調べた生徒には、グループ内で積極的に話すよう促し情報を提供させる。	◇（思）（態） □「記述の確認」（ワークシートⅡ下部半分） ＊グループで助言をし合いながらワークシートを完成させる。 ＊回収したワークシートの記述が不十分なものについては、コメントで助言をする。
第3次（1時間）	・ワークシートⅢを用いて各場面について整理し、どのような会話がなされたか考える。 ・立ってグループで実演し、タスクごとに気付いたことの記録をする。 ・活動を通して、全体の振り返りを記入する。	・各自で台詞を考えさせた後、グループで吟味をさせる。 ・実際に立ち位置に注意して立たせ、グループで実演させる。 ＊なるべく自由に話し合わせ、想像を膨らませやすくする。一方で、読みが恣意的にならないよう根拠も挙げさせる。 ・本文の内容について新たに理解したこと、感じた気付き等を記述させる。	◇（思）（態） ■「行動の分析」（グループ活動） ＊人前で話すことが苦手な生徒には、話さなくても立ち位置を考えることから始めさせる。 ■「記述の分析」 （ワークシートⅢ、相互評価表） ＊書けない生徒には、同じグループの生徒と話し合う時間を設定する。

5　本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

文章から場面を想像し、人々がどのような状況で発言、行動したのかを考えることができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

文章から場面を想像し、人々がどのような状況で発言、行動したのかを考え理解している。

(3) 本時（全４時間中の４時間目）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 （５分）	・本時の学習内容を知る。	①単元の目標と言語活動について確認する。	①ワークシートに従って人物の言動について考察を深めていくことを確認させる。
展開 （40分）	・ワークシートⅢに各自で登場人物の台詞を記入する。	②各自で人物の言動について考え、整理する。	②最初は周囲に相談せず自分で考えてワークシートに記入するよう促す。

	・グループでワークシートⅢを検討し合う。 ・タスクごとに実演する（計時する）。	③グループの生徒同士でなぜその台詞になるのか、なぜそのような行動をしたのかなどについて、根拠を挙げながら整理をする。 ④実際に立ち位置を考えながら立って台詞を言ってみる。	③読みが恣意的にならないよう、根拠を挙げながら考えるよう指導する。 ④タスクごとに計時をし、グループ内で実演させる。演技の技術を問うわけではないことを強調し、立ち位置とそこから発する台詞、掛けられる言葉の印象について考えるよう支援する。
終結 （５分）	・本時の内容を振り返る。 ・次時の内容を知る。	⑤リフレクションシートに記入する。 ⑥新しい単元に入ることを確認する。	⑤本時の目標に即した活動ができたか、またその達成度について振り返って記述させる。 ■ワークシート及びリフレクションシートを回収し、ルーブリックを用いて「記述の分析」により評価する。

６　研究の実際と考察

（1）言語活動

活動に入る前に、今回の活動はあくまで演技力ではなく身体的距離や人物の置かれた状況の把握が重要なので、台詞は棒読みでもよいから立ち位置をしっかり考えてやるようにと指示をした。生徒たちは事前に作成したワークシートを手にしつつ、「この立ち位置で合っているのか」「この記述から考えるならこういうことか」などとグループで確認しながら身体的距離を定めていた。そのたたき台としても、事前に台詞を書かせたワークシートは有効であった。実演は計時をし、タスク１つに対し８分を与え、その中で役割を交代しながら実践するよう指示した。生徒たちの実践のハードルを上げないために演技力が重要なのではないと強調していたが、生徒から「人物の距離感や声色は、心情を考えてやると自然と変わる」との声があった。実際、公任役を演じた男子生徒の中には、周囲の人々や道長の役の生徒に囲まれながら「圧を感じる」などと言って背を丸めながら「いや、私などはお遊びですから和歌の船に乗りますわ」と小声で演技をする者もいた。生徒たちは興に乗ってくるとアドリブを入れ始めるところもあり、活動を楽しんでいる様子が見られた。

一方で、グループ全体の理解度の差がそのまま活動の充実度にも影響していた。事前に現代語訳や台詞を考える段階における理解度が低いと、実際起立して活動という段階になっても何をしていいのか分からないというところもあった。また、「どうしても主観でやってしまうので本文の主旨から外れているかもしれない」という危惧の声もあった。実際大きく本文から外れた理解をしているグループは少なかったものの、「公任は力の誇示のために和歌の船に乗った」など、立案当初から懸念していた恣意的な読みに傾いてしまうことがあり、その都度「本当にそうなのか」「なぜそう言えるのか」といった声かけをして考えさせる必要があった。

(2) 自己評価

「人物の言動について、記述や調査結果に基づきながら、自分の立場で考えることができたか」を評価の観点とし、ＡＢＣ評価をさせた。おおむねできたをＢとし、よくできたと思うならＡ、できなかったと思うならＣを付けるよう指示したところ、Ｃは３、４人のみ、Ａは全体の２割程度、残りはＢという結果となった。授業者が見る限りでもほぼ一致するような様子であったので、生徒たちなりの客観的な自己評価ができていたように思う。加えて、身体を使った実践で感じたことを自由に記述させたところ、「いろいろな目線で物語を読むことができるから面白いと思った」「周りの人によって少し圧力がかかっているように感じた」「実際の場面を想像する上で、そのときの『常識』を気にするようになった」「台詞の『間』を考えた」「お互い直接的には言わない本当の思いが隠されていたのかもしれない」などと述べていた。テクストにあるのは「誰がどこで何をした、何を言った」程度のことであるが、その場の空気感であったりプレッシャーであったり、さらには人物の機微といった、書かれていない部分について想定以上に多くの生徒がよく考えることができていた。Ｃを付けた生徒たちは、やはり前項で述べたとおり、まず事前の現代語訳や台詞を考える段階においてつまずいていた生徒たちであり、そこにはより細かい支援の必要を感じた。

(3) 評価

事前に作成したルーブリックに基づいて、観察結果と生徒のワークシート、及びリフレクションシートとを併せて評価を行った。本文の表現から多くの課題を見いだし、活動を通じて自らのものの見方を広げた記述、身体を使った活動や話し合いからテクストにある内容以上のことについて考察を深めた記述をＡとした。例えば、「周りの人の存在が行動を決めてしまうときがある」「同じ出来事でも、立場や役職関係のつながりなのか、その他の関係性なのかによっても心情が変わることがあるし、人物の立ち位置によって時として相手に言えない気持ちがあるように思う」といった記述である。

７　研究の成果と課題

今回、東京を中心に幅広く活躍されている演劇家オーハシヨースケ氏に師事し、応用演劇の手法を用いて古典を読むという実践を試みた。オーハシ氏はイギリスのアレン・オーエンズ氏らとともに研究を重ねる中で「身体知」ということを提唱されており、読書や暗記からくる知とは異なる知のあり方を紹介されている。場の空気感や身体の距離からくる人間の感情の変化は実際に身体を置いてみると分かるという。日常生活で人と対話をする際も、これを意識すると相手の受け止め方が変わるというのである。

『三船の才』は短いテクストの中に政治的背景や人物関係がさまざまに絡んだ作品であるので、これまで幾度となく授業をしてきた中で、単純に現代語訳をするだけでは読後感がすっきりしないという印象があった。テクストを大事にすること、作者の意図を文から的確に読むことの重要性は言うまでもないが、実際に人物の距離感や言語を意識することで違った読みもできるのではないかという期待があった。

和歌より漢詩をうまく詠む方が社会的地位が上がるなどということを、公任が知らぬはずはない。うっかり和歌を詠んでしまって後から気付いて後悔するなどということも考えにくい。であるならば、なぜそうなったのかを検討する手だてが必要だと考え、今回は演劇的手法を用いることとした。そうすることでより深く作品の表現意図を理解し、生徒のものの捉え方を見つめ直す一助となると考えたからである。

身体を使った実践は演劇の経験者でもなければ抵抗が大きいと考えて、なるべく抵抗の少ない形で

できないかと考えながら臨んだ。しかしながら、生徒たちは物語の人物について身体を使いながら想像を膨らませる活動がことの外楽しかったようである。そして、複数のグループからよく聞こえた単語が「圧」であった。プレッシャーや脅迫などにより感じられる威圧感といったニュアンスで高校生がよく使用する「圧」であるが、この「圧」こそは、テクストに現れないが人物を動かす要因となりうる最たるものである。無論威圧感だけで公任が行動を決めたわけではないが、これは身体を使った実践でしか得られない収穫であったろうと考える。また、「視点の変化」ということも重要であった。何かをやる側、それを見る側、と立場を変えるとものの見方が変わってくる。また、何かを遠くで聞くのか、噂で聞くのか、直に近くで聞くのかでも印象は変わる。「心おごりせられし」の要因となりうる部分であり、そこに生徒の気付きがあった。

一方で、現代語訳の確認をグループ内でのみ行ったため、グループごとに精度の差が生まれ、うまく訳せているグループは次の活動に対する意欲も高かったのに対し、うまく訳せないグループは自分たちが何をやってよいのかもよく分からないということが起きたのは反省点であった。なるべく現代語訳の検討も実践の中で行って、より自分たちで考えさせたいという意図があったが、生徒によってはハードルが高かったようであった。一度全体で現代語訳を確認する時間を設けるなど事前の確認をきちんと行うことで、より多くの生徒が深い考察に至ることができたかもしれない。

身体を使いながら物語を読む活動には一定の収穫があったと感じる。今後もよりよい実践方法を模索していきたい。

参考文献

アレン・オーエンズ　ナオミ・グリーン著　小林由利子編
『やってみよう！アプライドドラマ　自他理解を深めるドラマ教育のすすめ』2010 年（図書文化社）